間質性肺疾患患者における咳嗽重症度の実態調査

佐藤　隆平[1)]，半田　知宏[2)]，松本　久子[2)]，久保　　武[3)]，
池添　浩平[2)]，谷澤　公伸[4)]，陳　　和夫[4)]，平井　豊博[2)]

[1)] 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座，
[2)] 京都大学大学院医学研究科呼吸器内科学講座，
[3)] 京都大学大学院医学研究科放射線医学講座，
[4)] 京都大学大学院医学研究科呼吸管理睡眠制御学講座

【背景】間質性肺疾患において乾性咳嗽を合併する頻度は高く，咳嗽症状は肺機能の低下等の疾患重症度と関連していること，疾患進行度予測としても有用なマーカーであることが示されている。しかしながら，咳嗽重症度と関連する臨床指標は明らかになっていない。
【目的】間質性肺疾患患者の咳嗽重症度を評価し，臨床指標との関連を検討する。
【方法】2015年8月から2016年8月の間に京都大学医学部附属病院呼吸器内科外来を受診した間質性肺疾患患者のうち，特発性間質性肺炎，膠原病合併間質性肺炎，過敏性肺炎例を対象に，横断研究を行った。咳嗽の強度と頻度をVisual analog scaleで評価し，逆流性食道炎問診（Fスケール）点数も評価した。
【結果】55名が登録され，1ヶ月以内の呼吸器感染症，鼻炎あるいは喘息併存例などの除外基準により36名（男性22名，61％）が解析対象であった。間質性肺疾患症例全体では咳嗽重症度と肺機能に関連はなかったが，特発性間質性肺炎患者群（17名）で咳嗽強度と％D_{LCO}との間に負の関係が認められた（rs＝−.538，p＝0.026）。また，同患者群において咳嗽頻度はFスケール8以上の症例群で高くなる傾向がみられた（p＝0.068）。
【結論】更なる症例の蓄積が必要であるものの，特発性間質性肺炎において咳嗽重症度評価は病態重症度指標として有用である可能性が示唆された。

【キーワード】間質性肺疾患，咳嗽，特発性間質性肺炎